

# 三省堂『古典A』

— 古典に親しむ態度を育てる

## 三浦和尚



はじめに

このたびの学習指導要領の改訂に伴い、新しい教科書『古典A』が編纂され、二七年度から全国の生徒たちに届けられることになった。本稿では新しい科目「古典A」に期待される内容を考察するとともに、それに対応する教科書としての三省堂『古典A』について紹介することとする。

### 一 育てるべき力

新しい学習指導要領においては、旧来の「言語事項」が拡大され、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」と

された。それに伴い、小学校においていわゆる「古典」が学習内容となったことは周知のとおりである。

このことが、高等学校の古典学習に一定の変化をもたらすことは想像に難くないが、実体としては当面、そういった変化というよりも、「古典A」「古典B」と科目区分されていることからわかるように、どのような生徒にどのような古典学習を保証するのかということの吟味のほうが課題としては大きいであろう。それは、実は古典学習は私たち教師が期待するほどは生徒たちに受け入れられてはいない、という現実があるからである。古典学習指導においては、「育てるべき古典の力を、「自力で古典を読む力」と

考えるのか、「生涯にわたって古典に親しむ態度」と考えるのか、二つのベクトルが考えられるように思われる。無<sub>二</sub>論<sub>一</sub>自力で古典を読む力」の育成の先にあるいはそれに並行して、「生涯にわたって古典に親しむ態度」が育成されるのであれば、いうまでもなくそれは最もまっとうな教育である。最終的にベクトルは一致する。しかし、それが必ずしもうまくいっていない状況が現実ではないか。「古典を読む力」を育てようとして、そのことを性急に進め、結果的に「古典嫌い」「古典離れ」を生じさせている傾向は否定しがたい。

考えてみれば、「古典A」の学習の趣旨においては、「生涯にわたって古典に親しむ態度」の育成を先行させることが必要なのではないか。

私自身は、古典学習の意義を、

- ・ 日本語の歴史をとらえる。
- ・ 日本の文化や精神の歴史をとらえる。
- ・ 「文学」として味わい、言葉や人間についての理解を深める。

といった点において考えているが、「生涯にわたって古典に親しむ態度」の育成を考えた場合、「日本語の歴史」というよりも「文学としての味わい(面白さ)」

を先行させる必要があるように思われる。そういう意味では、語釈や文法を扱いつつ、いわゆる現代語訳ができたところでは、ほぼ学習が完結しているという授業ではなく、現代語訳を用いても内容を深めていく発問・課題や活動に支えられる授業が求められているのだといえる。

## 二 学習指導要領における位置づけ

これまで述べた点を、もう少し詳しく学習指導要領の側面から見てみよう。

いうまでもなく『古典A』は、『現代文A』と対になった教科書で、基本的には二単位ものであり、旧来の『古典講読』を精神として継承した教科書である。

いささか煩雑になるが、新しい「古典A」の性格を明確にするために、これまでの「古典講読」と新しい「古典B」との違いを、学習指導要領に示す目標から見てみよう。

### ○「古典講読」の目標

古典としての古文と漢文を読むこと  
よって、我が国の文化と伝統に対する関心を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる。

### ○「古典A」の目標

古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を読むことよって、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる。

### ○「古典B」の目標

古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることよって人生を豊かにする態度を育てる。

このように比べてみると、「古典講読」を「古典A」が受け継いでいることがよくわかる。そしてその主眼は、「古典B」の「古典としての古文と漢文を読む能力を養う」ではなく、「古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を読む」であり、「生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる」ところにあることがよくわかる。「古典B」が「伝統的な言語文化」というよりも「読むこと」に力点が置かれるのに対して、「古典A」は「読むこと」よりも「伝統的な言語文化に親しむ」ことに重きが置かれるという説明がなされているのも、同様の趣旨である。

さらに言えば、「古典講読」にはない

「古典に関連する文章」が入ることによって、「古典A」は、「古典講読」でいわれた言語活動の取り入れや現代語訳の活用をさらに進める性格のものだと言える。内容の取扱(3)イで記される「教材には、古典に関連する近代以降の文章を含めること。また、必要に応じて日本漢文、近代以降の文語文や漢詩文などを用いることができること」は、まさにその方向性の文言であろう。

三省堂の『古典A』は、こういった国語学習の在り方の具現化を求めて編纂された教科書である。

## 三 新しい三省堂『古典A』

新しい三省堂『古典A』は、これまで述べたように新しい学習指導要領の趣旨を生かすとともに、「生涯にわたって古典に親しむ態度」の育成の具現化を図ることのできる教科書である。

「古文」の領域にスポットを当ててみると、三省堂『古典A』は次のような特色を持っている教科書であると説明できる。

### ○親しみやすい題材

古文教材はすべて説話を取りあげた。

説話だから親しみやすいと短絡的に語るつもりはないが、説話は基本的にその範囲で完結しやすい短い物語である。また、説話として今日まで伝えられたことは、そこに文学としての価値、人間としての価値があると長い歴史が証明してきたものでもある。生徒は、いつ、どこで、誰が、どうしたといった物語の骨格を理解しつつ、その面白さを味わうことができる。そしてそれは、長い物語の一部のような、前後の脈絡や、複雑な人間関係の理解を前提としなくても読めるという点で、生徒の負担感が減ぜられるものである。生徒たちは、短く、最小限の前提となる知識しか必要としない説話のそれぞれの面白さに、ストリートに入っていくことができるであろう。古文への親しみを生み出す第一歩は、そういう点にあるのではないか。

### ○過不足のない傍訳

生徒の学習負担を考慮し、適宜傍訳を付した。それは、物語の内容にできるだけ早く入っていくことを可能にするためである。

一方で、現代語訳という形はあえて避けた。これはいうまでもなく、原文を尊重し、原文を繰り返し読み直し、原文によ

りながら解釈していくことを大切にすることを。両者を共に満たすために、傍訳の量には慎重な検討がなされている。

### ○読みを深め、学びの定着を図る「学習の手引き」

「学習の手引き」は「課題」と「演習」で構成されている。「課題」は、語釈や文法にかかる内容はなるべく避け、本文の内容の探究そのものの課題を精選した。また「課題」は、「読みの着眼点」でもあり、その意味では「読み方」を示すものになっている。さらに「演習」は、その教材の中から特徴的な文法事項等を取り出し、確認する内容となっている。この問題にしたがって生徒たちが学ぶことによって、重要な文法事項の定着を図ることができる。

### ○古典文学の世界を広げるコラム

古典文学の世界への興味・関心を高めるために、また、発展的な学びの入り口になるように、適宜教材に関連するコラムを置いた。その内容は例えば次の通りである。

#### ・芥川龍之介と説話

『宇治拾遺物語』の「絵仏師の執心（絵仏師良秀、家の焼くるを見て喜ぶこと）」に合わせ、芥川龍之介の「地

獄変」を紹介している。芥川にとつての古典作品の意味が述べられるとともに、「両者を読み比べてみよう」という課題が付されている。

#### ・説話と中国の文章

『宇治拾遺物語』の「後の千金（のこと）」は、『莊子』の一節を原典とした説話である。中国の書物がこうした形で日本で受け止められてきたことを紹介している。

#### ・古典の中の「同じ話」

『今昔物語集』の「姨母捨山（信濃の国の姨母棄山のこと）」の話は、『大和物語』や『俊頼髓脳』などにも同じような話として採られている。ここでは『俊頼髓脳』と比べ、両者の作品の性格の違い（文種）に言及している。

以上のように、三省堂『古典A』は、学習指導要領の「目標」に掲げられる「我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる」ことを、生徒の立場、生徒の目線に立って真に具現化する教科書である。

広く生徒の学びに供されることを願ってやまない。

（みうらかずなお・愛媛大学）